令和7年 11月1日（毎月1日発行）　赤十字新聞　第1026号　昭和24年9月30日　第三種郵便物認可

赤十字 NEWS

Japanese Red Cross Society NEWS

11 NOVEMBER 2025
#1026

赤十字NEWS
WEB版はコチラ

©Olha Ivashchenko／IFRC

Leaders' Voices
国際赤十字・赤新月社連盟（IFRC）会長
ケイト・フォーブス さん

特集▶P. 2 人道支援は風変わりなしごと（ユニーク）

女性リーダーが見た赤十字

©Ibrahim Mollik / IFRC

Leaders' Voices
GLOW Red代表／元スウェーデン赤十字社社長
マルガレータ・ワルストロム さん

CONTENTS

TOPICS
能登の教訓を胸に、命をつなぐ備え
陸・海・空で挑む「半島の孤立」対策 …… P. 4
12月1日～12月25日はNHK海外たすけあい
「忘れられた人道危機」に、支援の手を …… P. 5

連載
LIVE 万博パビリオン …… P. 4
けんけつのいま …… P. 5

AREA NEWS
［京都］ JRCが企画！ 児童福祉施設の子どもたちを招いて夏祭り
［三重］ 点訳奉仕団が活躍 小学校で出張点字授業 ／他 …… P.6

WORLD NEWS
台湾東部洪水被害 救助に奔走する、赤十字ボランティア …… P.8

Present!!

A賞｜備えるセット
10名様

B賞｜赤十字手帳とカレンダーセット
10名様

詳しくはP.7をCheck! ▶

赤十字新聞　編集・発行／日本赤十字社 広報室　〒 105-8521 東京都港区芝大門 1-1-3　TEL：03-3438-1311　一部 20円　赤十字新聞の購読料は会費に含まれています。

日本赤十字社
Japanese Red Cross Society

日本赤十字社は
2027年に150周年。

古紙パルプ配合率100％
再生紙を使用

環境にやさしい植物油インキを
使用しています

SPECIAL FEATURE

人道支援は ユニーク 風変わり なしごと
女性リーダーが見た赤十字

世界191の国と地域に広がる赤十字社、赤新月社のネットワークには、組織の中核となって人道支援に奔走する女性リーダーがいます。今回は、世界で活躍する3人の女性リーダーにインタビュー。インクルーシブな発想と情熱で活動に取り組む彼女たち視点で、赤十字について語っていただきました。

Leaders' Voices

ケイト・フォーブスさん

©トルコ赤新月社
ファトマ・メリチ・ユルマズ さん

マルガレータ・ワルストロム さん

女性リーダーが見た赤十字 1

©Olha Ivashchenko／IFRC
2024年2月に人道支援ニーズを把握するためウクライナを訪問したフォーブスさん。市民を救援する赤十字ボランティアを激励した

国際赤十字・赤新月社連盟（IFRC）会長

ケイト・フォーブス さん

Profile

約40年前に、アメリカ赤十字社のアリゾナ州フェニックスの支部でボランティア活動を開始。全米で数十万人の赤十字ボランティアを統括するボランティア委員長など要職を歴任した後、IFRC理事会メンバーとして17年間活動する。2023年12月にIFRC会長に選出。女性としては史上2人目であり、IFRCの多様性とジェンダー平等への取り組みにも寄与する。

Kate Forbes

ボランティアが命を救う。
その存在の重要性を知ったとき、胸が熱くなった

私が赤十字に関わるきっかけは、アメリカ赤十字社（以下、アメリカ赤）でボランティアをする同僚からの誘いでした。アメリカ赤は全米に強力なネットワークを持ち、地域の災害などに対する備えと、発災時の対応、復興を支援する組織です。そのボランティアに誘われたことは名誉であり、私の義務でもあると考えました。実際に活動に参加すると、災害対応や献血、防災教育、復興支援に加えて、米軍の兵士やその家族のサポートまで、命を救うためにボランティアが果たす役割の大きさに触れ、深く感動したことを覚えています。

アメリカ赤には約230の支部があり、30万人のボランティアが情熱的に活動し、毎年約6万5000件の災害に対応しています。また、献血も重要な活動の一部です。現在はアメリカ国内の血液供給の約40%を担い、献血者数は年間約680万人*にものぼります。実は日赤とは深い縁があり、第2次世界大戦後に日赤が全国的に献血の事業に乗り出す際に、資金や機材、研修などを全面的にバックアップして、その背中を押した歴史もあるのですよ。

振り返ると、私が胸を打たれた赤十字の活動には、いつもボランティアがいました。友人の孫が赤十字の提供した血液製剤で命を救われたとき、私の故郷で大型ハリケーンの被災者500人を赤十字が受け入れてくれたとき、家を失った5人家族に宿泊場所や生活再建のサポートを提供する様子を目にしたとき…それらの活動はボランティアが中心となって動いていました。彼らの情熱と粘り強さは、コミュニティを支える大きな力です。世界各国の赤十字社、赤新月社で、ボランティアが献身的な活動を続けています。私はIFRC会長として、これからもボランティアと共に、透明性と説明責任を持って使命を果たします。

＊【参考】日本の年間の献血者数は約331万人（2024年度）。

©パレスチナ赤新月社 / IFRC
レバノン、エジプト、パレスチナ、イスラエルを含む中東、北アフリカ地域の国々や各国赤十字社、赤新月社を視察するため、エジプト赤新月社を訪問

女性リーダーが見た赤十字 2

©トルコ赤新月社
2024年4月、ガザに向けてトルコ赤の人道支援船「Ships of Kindness」が出航する際、救援物資を確認するユルマズさん。物資の総額は610万ドル相当に達した

トルコ赤新月社 社長

ファトマ・メリチ・ユルマズ さん

Profile

1975年、トルコ・アンカラ生まれ。アンカラ大学医学部卒業後、アンカラ市立病院医学生化学科教授、ユルドゥルム・ベヤズィト大学医学部教員などを経て、2015年からトルコ赤新月社の理事として活動。2023年2月の大地震後にケレム・キニック前社長が辞任した後、暫定社長期間を経て、7月にトルコ赤新月社初の女性社長として選出される。

Fatma Meriç Yılmaz

「あなたは一人ではない」
すべての違いを越えた赤十字の人道支援が、暗闇に灯る光に

私にとって、苦しみの中にいる人々の、最も困難な瞬間に手当てを施し、希望を持って人生を見つめられるように導く人道支援は、医師としての理想とも完全に一致します。私の専門性をより広い社会貢献へと昇華させてくれた赤十字は、偉大な家族です。

女性は人道支援の現場においても積極的に関わり、母親や姉妹のような思いやりと忍耐を持って活動していることを私は知っています。だからこそ、私がトルコ赤新月社（以下、トルコ赤）初の女性社長として組織の中で女性の存在感を高め、人々を救済する女性たちに勇気を与えることをうれしく思います。トルコ赤の歴史は157年。昨今では地震の被災地に大学進学を目指す学生のための図書館を設立したり、ガザへ人道支援船を出して救援物資を届けたりと、困難な状況下にある人々を支えることを使命に活動しています。私たちは、すべての違いを越えて、人々の共通の良心を代弁する存在です。

2023年2月のトルコ・シリアにまたがる大地震では、私たちは痛ましい教訓を得ましたが、トルコ赤の職員とボランティアの献身は、大きな光を与えてくれました。彼らの中には家や家族をなくした者もいましたが、強い決意で他者を助けようと駆けつけました。助けを求める声に耳を傾け、誰かの支援に向かうことは、暗闇でろうそくを灯すようなものです。その火は、暗がりで失意の中にいる人々にも、「私は一人ではない」と気づかせてくれます。そして、人間の善意を信じる気持ちを強くしてくれるでしょう。暗闇に火を灯す、そのかけがえのない行動こそが、赤十字社、赤新月社の役割です。

2025年9月、大阪・関西万博の「ウーマンズ パビリオン in collaboration with Cartier」で開催された「GLOW Red」のトークイベントにも登壇

女性リーダーが見た赤十字 3

バングラデシュの避難民キャンプを視察するワルストロムさん
※ワルストロムさんの画像全て©Ibrahim Mollik / IFRC

GLOW Red代表／元スウェーデン赤十字社 社長

マルガレータ・ワルストロム さん

Profile

1950年、スウェーデン生まれ。長年、赤十字および国連で指導的地位を務め、2017年にスウェーデン赤十字社の社長に就任。2018年には、国際赤十字・赤新月運動における女性ネットワーク「GLOW Red」の発起人となる。ジェンダー平等の提言活動など、長年の功績が評価され、赤十字・赤新月運動の最高栄誉、アンリー・デュナン記章を受章。

Margareta Wahlström

被災者の半数は女性
でも支援の決定者に女性がいない…それに気づき、赤十字は変わった

苦しみを伴う危機的な状況にあっても、見返りを求めず、ただ思いやりの心だけで届け、傷ついた人々に寄り添う。この行動を何と呼ぶでしょう？ そう、「人道支援」です。人道支援は、風変わりな職業です。あえて苦しみが蔓延（まんえん）する状況に飛び込み、過酷な労働環境でも、立ち止まらない。存在そのものがユニーク。しかし、常に強く心を揺さぶられる出会いや気づきがあります。

1970年代後半、私は戦後のベトナムで数年働き、その後、クメール・ルージュ政権崩壊後のカンボジアで活動しました。戦争によって荒廃した両国で、出会った人々に計り知れない尊厳と誇りを見出し「災害や紛争で苦しむ人々を支援する人生を送りたい」と決意しました。

IFRCの活動に従事する中で、2017年、IFRCの理事に選出された29人の中で女性がわずか5人であるという現実に、私は愕然としました。なぜなら、被災地で救われるべき人々の半数以上は女性なのです。人道支援の意思決定の場に女性がいなかったら、女性の被災者のニーズに適切に応えられるでしょうか？ 私は危機感を覚え、女性リーダーの比率を上げるための組織改革に挑みました。「GLOW Red」も、その取り組みの1つです。今では、IFRCの意思決定の場に参加するリーダーの半数が、女性になりました。

ガザやスーダンなど、困難で試練の多い環境でも、ボランティアや職員が同じ志で「尊厳と敬意」を大切にした支援を行う姿には心を打たれます。赤十字社、赤新月社は、世界で最も歴史が古く、また最も広く活動をしている人道支援組織です。たとえ世界的な緊張が私たちの活動に影響を与えようとも、人々の信頼に応え、必要とされるときに動ける能力と準備態勢を保つことが、私たちの重大な責務です。そのために、緊急時だけではなく平時から、市民と共に備えと予防を推進することを大切にしたいと思います。

日赤が運営するバングラデシュ避難民キャンプ内の診療所の前で、日赤職員と共に（ワルストロムさんは前列左から3人目）

GLOW red

「GLOW Red（グローレッド）」=The Global Network for Women leaders in the Red Cross Red Crescent Movement。国際赤十字・赤新月運動における女性リーダーの活躍と育成を目標に掲げた世界的ネットワークで、2018年に発足。女性のエンパワーメントの推進、幹部職における男女の機会平等の強化など、多様性の重要性を積極的に提言する。これまで世界120以上の赤十字社、赤新月社から約700人が参加。今年の大阪・関西万博では、「災害や紛争における女性リーダー」などをテーマにパネルディスカッションを行った。

ジンバブエの刑務所で収容者と面談する五十嵐さん

日本赤十字社 国際部

五十嵐玲奈（いがらし れな） さん

赤十字が止められる「悪」がある

赤十字国際委員会（ICRC）は国際人道法の番人と呼ばれています。私は、ICRCへの出向中、ジンバブエで刑務所や収容所にいる捕虜の訪問を行っていました。国際人道法に従って、彼らが人道的な扱いを受けているか確認するためです。独房を1つ1つ訪ねて話を聞いていくと、彼らからも要望がでますが、それに応えることは難しいです…。それでも、定期的な訪問を続けることに意味があります。人種差別撤廃の指導者、ネルソン・マンデラ氏は27年も収監され、解放された後に「ICRCがもたらす善だけでなく、ICRCが防ぐ悪も重要だ」と述べました。人道に反する行為の抑止力になる、それが赤十字の存在意義です。

現在、赤十字が女性リーダーを推進するのは、女性の権利を擁護するためではありません。赤十字が真の意味で公平で、多様な視点で効果的な支援を届ける。その使命を果たすために、女性のエンパワーメントにも力を入れています。

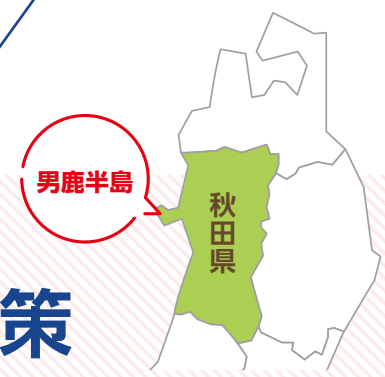
Profile

2003年日赤に入職。赤十字国際委員会（ICRC）、国際赤十字・赤新月社連盟（IFRC）ジュネーブ本部への出向歴を持ち、現在は日赤本社国際部でGLOW Redを推進する。

TOPICS

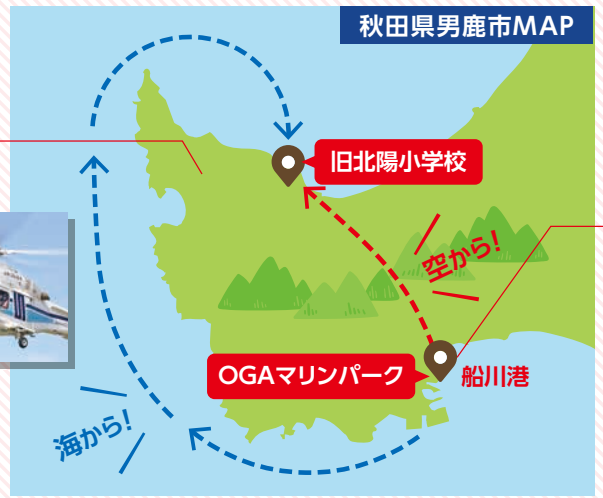
1 TOPICS

能登の教訓を胸に、命をつなぐ備え
陸・海・空で挑む「半島の孤立」対策



■ヘリで到着した日赤救護班

日赤救護班が搭乗した海上保安庁のヘリコプターがOGAマリンパークから飛び立ち旧北陽小学校へ。患者役として地元住民も参加した



■船川港での訓練

訓練は陸路が遮断されている設定。海から支援に回る。海上自衛隊の船が支援車両や物資を載せて着岸

日本には、能登半島や男鹿（おが）半島、丹後半島など約80の半島があり、いずれも独特の地形を持ちます。2024年の能登半島地震では、道路の寸断により救援が遅れ、物資輸送や医療支援が困難を極めました。こうした**「半島災害」は、陸路の途絶にとどまらず、海に囲まれた地理的な制約から通信・物流・ライフラインの復旧に多大な時間を要し、地域そのものが孤立するというリスクを抱えています。**

この教訓を踏まえ、内閣府、秋田県、男鹿市の共催で、災害発生時における孤立化対策訓練が行われました。訓練には、日赤秋田県支部、秋田赤十字病院救護班を含め、関係機関約30団体が参加。当日は陸・海・空の自衛隊が中心となり、国と多くの関係団体が連携して行う大規模な総合訓練として、災害対応能力の向上を図りました。

想定では、男鹿半島北西約80kmを震源とした最大震度6弱の地震と津波が発生。災害対策本部の設置から情報収集、物資の海上輸送、避難者の航空輸送、避難所の開設・運営まで。各機関が連携し、実際の災害現場さながらの緊張感の中で訓練が進められました。

秋田赤十字病院・大村範幸 医師（日赤救護班 班長）

改めて「受援する側」の訓練がいかに重要か、と感じました。支援を届ける側だけでなく受ける側が、迅速かつスムーズに対応できる仕組みを整えることが大切ですね。それに加えて日赤の「こころのケア」や「災害関連死を防ぐ取り組み」も生かし、誰もが安心できる支援環境づくりに貢献したいと思います。

日赤救護班は医療従事者輸送訓練に参加。OGAマリンパークから海上保安庁のヘリコプターで、孤立地域と想定された北浦地区・旧北陽小学校へ向かい、避難所の設営や傷病者の応急救護、他機関との情報伝達などを実施しました。訓練を通じ、半島地域における支援体制の新たな可能性と、今後の課題が明らかになりました。

STREAM LIVE vol.7 最終回！

万博パビリオン

来館者数（人）	：31万33人
メッセージ投稿数	：9万536通
特設サイトの訪問者数	：148万1278人

OSAKA, KANSAI, JAPAN EXPO 2025

©Expo 2025

感謝で心がふるえた！ 感動のフィナーレ

10月13日に閉幕した大阪・関西万博。記録的な猛暑が続く中、国際赤十字・赤新月運動館（通称：赤十字パビリオン）の予約キャンセル待ちの長い列は途切れることがなく、パビリオンスタッフとして全国から参集した日赤職員・ボランティアは一致団結して、より多くの方に感動を届ける運営に尽力しました。日赤本社の万博推進室メンバーの感謝の声を一部ご紹介します。

岡山（おかやま） 晃久（あきひさ）館長

約31万人のご来館者、そしてスタッフとして運営に携わった全ての職員・ボランティア、また、関係者の皆さまに、心から感謝をお伝えしたい。**この万博を通して『苦しんでいる人を救いたい』という志が、未来へと受け継がれていきますように。**

齊藤（さいとう） 彰彦（あきひこ）さん

退館後のアンケートの中に「まずは自分の身近な人にやさしく接しようと思う」という声を見つけたときはハッとしました。**紛争や災害でなくとも人道の精神は身近な人へのやさしい気持ちからはじまる。**これが実現できただけでも、パビリオンの存在意義がありました。

菅井（すがい） 智（さとし）さん

皆さまのおかげで、誰もが明日から何かやらねばと感じる、そんな背中を押せたパビリオンになれました！ 私も40年、赤十字活動を続けていますが、**誰の心の中にもある「思い」に火をつけ、燃え上がらせることも赤十字の役割**だと、気づかせていただきました。

赤十字パビリオンを応援してくださった皆さまへ、**日赤職員から感謝の声** Fullバージョンはオンライン版で！▶

2 TOPICS

12月1日～12月25日はNHK海外たすけあい
「忘れられた人道危機」に、支援の手を

ウクライナやイスラエル・ガザなど、紛争によって苦しむ人々の姿が連日報道される一方で、モンゴルやルワンダなど、世界から注目されていない「忘れられた人道危機」も深刻さを増しています。さらに、気候変動による災害が頻発し、その影響で生活を脅かされている人々も少なくありません。

今、世界で、緊急の人道支援を必要としている人は3億人にも上るといわれています。

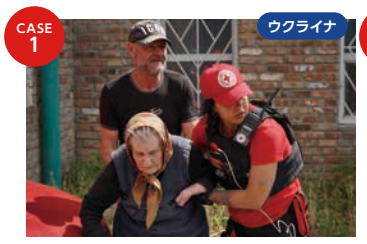
日本赤十字社では、**「世界のどんな場所にも支援を届け続けたい」という思いのもと、NHKと協力し、今年も12月に「NHK海外たすけあい」キャンペーンを実施します。**1983年の開始以来、皆さまからの支援は、紛争による難民・避難民支援や、自然災害に伴う食料・保健衛生支援、レジリエンスを高める防災教育の推進などに生かされてきました。

11月下旬には、特設サイト「SAVE365 Magazine」で今年のキャンペーン詳細を公開予定です。今あらためて、人道支援を必要としている人々の実情に目を向けてみませんか。

日赤WEBサイト

寄付によって実施できた赤十字の支援活動

CASE 1　ウクライナ



紛争に伴う難民・避難民への支援

CASE 2　モンゴル

©モンゴル赤十字社

頻発、激甚化する災害への対応

CASE 3　ルワンダ

人々のレジリエンスを高めるために

世界から届いた「ありがとう」の声

ガザ南部ラファ　**リームアボさん**

他の病院では受け入れを断られ不安でしたが、赤十字の野外病院に救われ、帝王切開で無事に出産できました。赤十字の医師・看護師に感謝しています。

けんけつのいま
支える命、つなぐ未来。vol.8

このコーナーでは、献血を推進するために各地で行われているさまざまな取り組みを紹介していきます。

Promoting Blood Donation

「救いたい」心に火をつけた万博コラボ

身近な赤十字活動の一つである“献血”へ参加いただくことを目的に、赤十字パビリオンとコラボレーションした献血キャンペーンが、近畿2府4県（滋賀県・京都府・大阪府・兵庫県・奈良県・和歌山県）にある全ての献血ルームにて実施されました。赤十字パビリオンに来場して献血の事前予約をし、実際に献血にご協力いただいた方への記念品（ミャクミャクと、けんけつちゃんが描かれた扇子）を5000本用意していましたが、キャンペーン終了1カ月前には配布が終了、企画担当者らの予想をはるかに超える成功を収めました。近畿ブロック血液センターの濵田雅俊さんは次のように振り返ります。

「1つの献血イベントで1カ月に1000人を集めるのは至難の業です。さらに、本キャンペーンは、赤十字パビリオンの専用端末（NFCタグ）から予約する必要があり、普段献血協力をいただいていない来場者にも献血へ興味を持っていただけるか不安もありました。しかし、**日を追うごとに献血ルームでは『赤十字パビリオン良かったよ』、『赤十字パビリオンで感動して数十年ぶりに献血に来た』という声や、初めて献血協力してくださる方が増えていきました**」

濵田さんは、この万博によって「赤十字運動＊」の協力者が増えることを期待していたが、こんなにも好循環が生まれるとは、と驚嘆します。

「私は、東日本大震災の発災時に救護班として被災地に赴いた経験から、赤十字運動を多くの人に広めたいと思っていました。本キャンペーンを通して、**『赤十字パビリオンへ来場された方が、誰かを“救いたい”という気持ちになり、献血へ協力する』という赤十字運動を目の当たりにし、胸が熱く**なりました。これからも、多くの方へ赤十字運動を広めていきたいです」

「万博DE献血」閉幕1週間前に万博会場内の献血が実現し、10月6・7日で431人が協力。献血に加え、救急法も体験できる赤十字啓発ブースも出展。2日間で約4500人が来場した

＊赤十字運動：紛争・災害などで苦しむ人を救う赤十字の活動に賛同・参加し、協力の輪を広めること

Area News

エリアニュース

全国各地、あなたの生活のすぐそばで
日本赤十字社の活動は行われています。

01 KYOTO JRCが企画！ 児童福祉施設の子どもたちを招いて夏祭り

日赤京都府支部では、8月21日に青少年赤十字（JRC）夏祭りを開催しました。この企画は、青年赤十字奉仕団のメンバーで、府内の児童福祉施設で働く宮本佳蓮（かれん）さんが、「施設の子どもたちに地域に出ていろいろな人と関わってほしい」という思いで発案。JRCメンバーがそれに応え、子どもたちとの関わり方や安全配慮についての勉強会を経て、企画、準備を行いました。当日は施設の子どもたちが招かれ、スタンプラリーやペットボトルを活用したボーリングなど、手作りの縁日コーナーで子どもたちをもてなしました。終了後宮本さんは、「これからも小さなニーズにも目を向けて、地域に還元する活動をしていきたい」と語りました。

02 MIE 点訳奉仕団が活躍 小学校で出張点字授業

日赤三重県支部点訳奉仕団は、9月19日に桑名市の小学校4年生に、点字の授業を行いました。点字器と点筆を使って50音の打ち方を練習した他、日用品にある視覚障害者への工夫を見たり触ったりも。子どもたちからは、「点字には規則性があることが分かった」といった声があがりました。奉仕団メンバーは、「これから外で目が不自由な人を見かけたら、『何かお手伝いしましょうか？』と声をかけてね」と呼びかけました。

03 KUMAMOTO 03 SAGA 03 HYOGO ハローキティが赤十字病院に！車いすも贈呈

© 2025 SANRIO CO., LTD. APPROVAL NO. GS660026

㈱サンリオは社会貢献活動「Sanrio Nakayoku Project（サンリオ ナカヨク プロジェクト）」の一環で、各地の赤十字病院に47台の車いすを寄贈、ハローキティが小児病棟を慰問しました。

9月2日、熊本赤十字病院を訪れたハローキティに、入院中の子どもたちは大興奮。この日を心待ちにし、お手紙を用意した子も。笑顔と勇気をもらい、病棟全体がやさしい空気に包まれ、職員にとっても大切なひとときになりました。（1）

同3日には、唐津赤十字病院を訪問。小児病棟を回って笑顔を届けるハローキティに、子どもたちは「キティちゃんに会うのは初めて！」と大喜びで握手やハグを交わしました。それを見たご家族からも、喜びと感謝の声が寄せられました。（2）

同9日には姫路赤十字病院へ。プレイルームでハローキティちゃんと一緒にダンスをしたり、記念撮影をしたり、楽しい時間を過ごしました。また、移動が難しい子どもたちへはハローキティが各病室を訪問し、素敵なプレゼントを手渡し。病棟内が笑顔で包まれました。（3）

04 KAGOSHIMA 04 OSAKA ワールド・ファーストエイド・デー 大阪・関西万博でもイベントが大盛況

9月第2土曜日は「ワールド・ファーストエイド・デー（世界救急法の日）」。日赤は各支部で、心肺蘇生や応急手当など、事故予防のための知識と技術の普及のための講習やイベントを開催しました。

鹿児島県支部では、IFRC*が本企画の2025年テーマとして定めた『気候変動と応急手当』に基づき、気候変動に伴うリスクに対する予防や手当ての知識と技術を学ぶイベントを実施しました。熱中症の予防と手当てが学べるパネルの展示や、心肺蘇生とAEDの使い方体験などを通して、家族連れを中心に多くの人が学びを得ました。（1）

大阪府支部では、大阪・関西万博の赤十字パビリオン前で、心肺蘇生・AED体験イベントを実施しました。このイベントには、新日本プロレス所属の真壁刀義選手、マスター・ワト選手がボランティアで参加。トークショーで真壁選手は、「AEDを知ることが財産になる」と、自らデモンストレーションを行いながら、救急法を学ぶ意義をアピールしました。その後、約120人の参加者が、選手たちと一緒に心肺蘇生の体験にチャレンジしました。（2）

＊国際赤十字・赤新月社連盟

05 KOCHI 05 KAGAWA 05 EHIME 9月は防災月間 南海トラフ地震を想定して四国で防災イベント

1923年9月1日の関東大震災を教訓とし、9月は防災月間に定められています。

日赤高知県支部では、9月7日に「赤十字防災・減災イベント ～家族の命を守り、避難生活を考える～」を開催。今年は、JRCメンバーが発案したゲーム形式で防災リュックの中身について考えるブースや、奉仕団によるAEDの使い方講座、避難生活でのリラクゼーションの体験などで楽しく学び、防災意識を高めるイベントとなりました。（1）

香川県支部では、9月20日から21日にかけて、さぬき市大川町の南川自然の家で「防災キャンプ2025」を開催。安全奉仕団、レスキューサポートバイク奉仕団、アマチュア無線奉仕団、青年奉仕団、防災ボランティア、青少年赤十字から37人が参加しました。災害時を想定したテントの設営体験では、参加者全員がテントの立ち上げ手順を体験。他にも、災害時に役立つロープワークや炊き出し調理、発電機や無線機の取り扱いなど、さまざまな知識と技術を楽しく学びました。（2）

愛媛県支部では、9月30日に宇和島市立岩松小学校で「手つなぎ防災ひろば」を実施しました。この地域は、南海トラフ巨大地震が発生すれば最大7メートルの津波が到達する可能性があると言われています。日赤の防災セミナーメニュー「おうちのキケン」「まもるいのち ひろめるぼうさい」を使用したグループワークで防災意識を高め、さらに応急手当や搬送方法の体験、ハイゼックス袋による炊飯も実施。参加した児童からは、「準備することの大切さがわかりました」といった感想が聞かれました。（3）

赤十字情報プラザ 企画展 99年目の救急法 ～赤十字救急法講習のあゆみ～

赤十字WEBミュージアム

日赤では、戦争や災害救護で蓄積した救命のノウハウを一般市民に普及することで、一人でも多くの命を救うことを目的に、1926（大正15）年12月に救急法を含む「衛生講習会」を開始しました。現在までに、2071万人以上（2025年3月31日時点）が受講しています。来年で赤十字救急法講習100年を迎えるのを前に、「99（きゅうきゅう）年目」にあたる今年、救急法普及の変遷を振り返り、改めてその重要性を啓発する企画展「99年目の救急法～赤十字救急法講習のあゆみ～」を開催します。日赤本社1階の赤十字情報プラザでは、11月4日から展示を開始。また、赤十字WEBミュージアムでも本企画展の内容を公開中です。赤十字救急法が生まれた契機やこれまでを振り返る貴重な資料の数々がご覧いただけます。

赤十字情報プラザの詳細（来館予約）はこちら

常任理事会開催報告

令和7年10月17日、令和7年度第6回の常任理事会が開催されました。

今回の常任理事会では、地域における赤十字病院の現状と今後の方向性、日本赤十字社創立150周年プロジェクトにかかるワークショップの実施についてそれぞれ報告しました。

PRESENT!! “日赤トリビアクイズ”に答えてプレゼントを当てよう！

Quiz

Q. 1926年に開始した「衛生講習会」の中から、救急法が独立し、単独講習になったのは1934年。その背景には、どんな社会変化があったのでしょう？

ア：1933（昭和8）年に発生した昭和三陸地震の被害が大きかったため

イ：海水浴に出かける人が増え、水難事故が多発したため

ウ：交通機関の発達により、事故が増加したため

ヒントは右の二次元コードから▶▶▶

プレゼント

10名様に当たる！

A賞 備えるセット（3種で3240円相当）

●ハートラちゃん 携帯トイレ×3個

●緊急時用トイレセット アートトワレ
普段はアート、災害時はトイレ。壁に飾る防災！（サイズ／約縦17×横17×奥行2.5㎝）

●ハートラちゃん コットンバッグ
避難用バッグとは別に用意したい「防災グッズ収納バッグ」としてもおすすめ！（サイズ／約縦36×横37×底マチ11㎝）

B賞 赤十字手帳とカレンダーセット

●2026年版 赤十字カレンダー
（B3壁掛け、14枚つづり）
税込み990円・送料別

●2026年版 赤十字手帳
（約15cm×9cm、赤日リバーシブルカバー、別冊赤十字便覧付き）
税込み390円・送料別

※カレンダー表紙画像は昨年のものです。お届けは今年のものになります

10名様に当たる！

日赤サービス オンラインショップ

ハートラちゃんやサンリオキャラクターズとコラボした商品も随時発売中！

【お問い合わせ】（株）日赤サービス TEL：03-3437-7514

赤十字NEWSオンライン版はコチラ

赤十字NEWSはWEBでも閲覧できます。ぜひアクセスしてください！

プレゼント希望者は右の2次元コードからご応募ください。

応募締め切り：11月28日（金）

※当選者の発表はプレゼントの発送をもって代えさせていただきます

ご応募はこちらから

WORLD NEWS

―ワールドニュース―

台湾ってどんなところ？

東アジアの太平洋上に位置し、人口約2340万人が暮らす。2011年の東日本大震災や2024年の能登半島地震など、過去の日本の災害において、多くの義援金などで被災地の復興を支えたことでも知られる。花蓮県は、台湾でも人気の観光地だったものの、昨年4月の大地震の影響で景勝地・太魯閣渓谷も閉鎖され復興に時間を要するなど、観光産業も打撃を受けている。

台湾東部洪水被害 救助に奔走する、赤十字ボランティア

2025年9月下旬、超大型の台風18号が台湾南部に接近。台風に伴う大雨により、台湾東部の花蓮県では大規模な洪水が起こるなど、深刻な被害が発生しました。2024年4月の台湾東部沖地震でも大きな被害があり、復興に向けて歩みを進める中で、2度目の被災。現地から被災者支援の状況と、今回も勇猛果敢に活躍した救助ボランティアの姿をリポートします。

せき止め湖が決壊 一瞬にして泥水に飲まれた街並み

台湾花蓮県は、昨年の4月に台湾東部沖沿岸で発生したマグニチュード7.4の大地震の影響で、観光地の太魯閣（タロコ）渓谷が大規模な地滑りと落石を起こして閉鎖された他、建物の倒壊や土砂災害によって20人の犠牲者と1100人以上の負傷者を出すなど、大きな被害を受けました。地震から1年以上経過し、懸命な復興活動が続けられている最中、今年9月22日から23日にかけて、大型台風18号が台湾南部を通過。それに伴う大雨の影響で、23日午後3時頃に県内の河川・馬太鞍（ファンタアン）渓（けい）の上流にあるせき止め湖が決壊し、推定6000万トンの水が一気に下流へ押し寄せました。大量の泥水が堤防を越えて下流の地域を襲い、馬太鞍渓橋を崩壊させ多くの住民が逃げきれず、家屋に取り残される危機的状況に。このときの様子を、「まるで津波のようだった」と住民は話します。

台湾赤十字組織（以下、台湾赤）は、知らせを受けて直ちに緊急対応を開始。花蓮県の救助ボランティアの隊員15人が3隻のゴムボート、5台の車両に分かれて被災地へ向かいました。ボランティアとして、日頃から訓練を重ねる精鋭揃いの救助隊は、同日夕方には被災地に到着し、消防本部から得た行方不明者リストを元に捜索を行い、91歳の高齢女性をはじめ、次々と被災者の救命に成功。深夜3時まで捜索を続け、翌朝8時には再び任務に当たるなど、1人でも多くの命を救うために懸命の救助活動を行いました。

また、**台北からも、台湾赤職員と水上安全ボランティア7人の支援隊が2艇のモーターボートを積んで花蓮県へ急行。**ボランティアたちは救助隊と協力し、家屋の2階以上に取り残された住民の救出に当たりました。泥水が急激に上昇したため、多くの住民は靴を履く暇もなく裸足で避難。特に高齢者は、泥に足を取られて歩行すら困難な状況。赤十字ボランティアたちは、そのような高齢者や住民らを支えながら歩行を助け、ときには背負って安全な場所まで運びました。

救命救助のみならず、物資支援も即時に開始。発災当日には、緊急避難所となっている小学校に寝袋100個、衛生キット66セット、毛布200枚をいち早く届けました。その後も、9月27日までに寝袋267個、日用品セット126組、毛布500枚、寝具マット450枚の物資を配布するなど、被災者のニーズに合わせた支援を続けています。

病院に運ばれた人々を訪問 寄り添いながら共に復興へと

救助された人の中には、一命は取り留めたものの、深い傷を負った人もいます。台湾赤職員は、発災2日目に被災者が入院する病院を慰問しました。

若い頃の事故の影響で下半身まひとなり、長年寝たきりで生活していた黄さんは、洪水時に息子が背負って2階に避難。命は助かりましたが、その後、家は全壊し、この先の生活や介護の面で大きな不安を抱えています。病院に見舞いに訪れた娘に「叔父（黄さんの弟）の家も流された」と伝えられた際は、実弟が流されて亡くなったと勘違いし、錯乱状態に。度重なる苦悩によって、精神的にも不安定な状態に陥っています。

高齢の呂さんは、地方自治体で働く息子と2人暮らしでしたが、災害発生時、息子は緊急対応で1人での避難を余儀なくされました。息子から「上階に避難して！」と電話があり、震えながら階段を上って避難し、救助隊によって避難所に搬送。避難所でストレスを抱えた人から「あなたは孤独だ。誰もそばにいてくれない」という心ない言葉を投げかけられ、深く傷つき、入院してからも気持ちが落ち込んでいましたが、慰問した**台湾赤職員からの「あなたの息子は英雄です。そばにいてあげられないのは、もっと多くの人を救うためですよ」という言葉に涙し、笑顔と誇りを取り戻しました。**

地震からの復興の道半ばで襲った洪水は、台湾に再び多くの喪失と傷をもたらしました。街も人々も元気を取り戻すにはまだまだ道のりは長いかもしれませんが、赤十字はこれからも被災者に寄り添い、支援を続けていきます。

地震の際に活躍した救助ボランティアのストーリーはこちら▶

2階に閉じ込められた高齢者を救出する救助隊

現場は泥だらけで、高齢者はほとんど動けない状態。ボランティアが高齢者たちを背負って避難を手伝った

入院先への慰問と激励を喜び、台湾赤職員との記念撮影を希望する被災者も

画像全て©台湾赤十字組織